

国際学会出席報告

「海洋科学技術に関する太平洋会議」

山室真澄¹⁾

1999年6月23日から25日まで、モスクワにあるロシア科学アカデミー本部ビルで行われた「海洋科学技術に関する太平洋会議 (The Pacific Congress on Marine Science and Technology)」に出席しました。

「海洋科学技術に関する太平洋会議」は海洋科学者・海洋工学者・政策担当者からなる会員制のNPOで、本部はアメリカ合衆国ハワイ州にあります。当初は上記の複数分野の会員が太平洋に関する情報交換を行うことを目的としていましたが、より国際的に多くの関連分野からの議論を行うべきだとの方針から、会員以外の参加も求めて国際会議を開くようになりました。1984年から1992年までは2年毎、1993年からは毎年国際会議を開催し、開催国はアメリカ・日本・中華人民共和国・オーストラリア・香港・韓国・そして今回のロシアと、太平洋を取りまく国々で行われてきました。

それぞれの会議にはメインテーマが設定されるのですが、今回のテーマは1990年代最後の会議とあって“Humanity and the World Ocean: Interdependence at the Dawn of the New Millennium”で

した。具体的には第1表に示した21テーマについて、口頭(質疑を入れて20~30分)とポスターによる発表が行われました。会の趣旨から、専門的に特化した話題ではなく、より包括的・実学的なトピックになっています。実際、講演内容も特殊な専門分野の最先端の紹介というよりは、それぞれの国・地域の現状紹介的なものが多いように思いました。

これだけ多数の発表なので、4会場に分かれて発表が行われました。このため、興味があっても重なって聞けなかった講演がいくつかありました。例えば(20)のテーマは、要旨集には「ロシアでは海洋学を志す女性は教育の段階から就職後まで不利な立場にある」「このような状況を打開するために、世界的な支援を求める」とあって興味深かったのですが、自分が講演するセッションと重なってしまい、聞けませんでした。

私は専門が生物地球化学なので、(7)・(9)・(10)を中心に講演を聞きました。ロシアというと寒い海だけがフィールドと思っていましたが、黒海やバイカル湖など特異な環境を活かした研究が印象的でした。またかつてはビッグパワーとして、海洋学も七つの海全てを対象としていたようです。今でもその名残か、アメリカやドイツと組んで海外で共同研究した成果の発表もありました。例えばベーリング海のバクテリアから哺乳類に至る生物相の10年スケールでの変動をアメリカとロシアが共同で調べた結果が報告されていましたが、哺乳類や動物プランクトンの変動をドイツと共同で北海で調査した結果と比較するなど、スケールの大きさを感じました。

海洋学がかつては国策上重要であったことを感じさせるのが、海洋関係者の数の多さです。例え

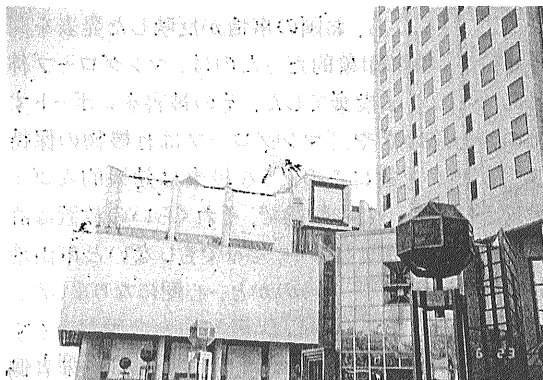


写真1 ロシア科学アカデミー本部ビル外観。

1) 地質調査所海洋地質部

キーワード: 国際学会, 海洋学

第1表 会議のテーマと発表件数.

テーマ	口頭発表	ポスター発表
(1) Ocean remote sensing	14	4
(2) Ocean-atmosphere interaction and climate problems	13	5
(3) Physical fields of the oceans	14	18
(4) Marine instrumentation and technology including undersea vehicles	7	7
(5) Marine seismology and tsunamis	9	9
(6) Marine geology, geochemistry and geophysics (marine geology)	23	24
(7) Marine geology, geochemistry and geophysics (marine geochemistry)	6	11
(8) Marine geology, geochemistry and geophysics (marine geophysics)	8	12
(9) Marine biology achievements	13	6
(10) Ocean environmental problems	12	9
(11) Oceanic hazardous events	12	3
(12) Marine resource management and development	7	
(13) Onshore and offshore oil-gas fields		5
(14) Marine food resources (mariculture and fisheries)	8	
(15) Ocean energy	5	9
(16) Sustainable development	16	
(17) Marine policy and international cooperation	6	3
(18) Radioactive pollution in the world ocean	16	10
(19) Neutrino astronomy from the deep ocean	12	
(20) Women in marine science, business and education	6	
(21) Tourism and recreation	7	

ば1946年に設立されたP. P Shirshov Institute of Oceanologyという一つの研究所だけで、2,000人のスタッフと8隻の大型研究船を有しています(因みに日本海洋学会の会員数は5月末現在で2,197人です)。それでも関係者は「かつての半分の規模にされてしまった」と嘆いていました。その研究員の一人で、予算削減から身分だけ残して日本の地球フロンティア研究システム(宇宙開発事業団と海洋科学技術センターの共同プロジェクト)で研究を続けているロシア人研究者と知り合いになりました。この学会の参加も、地球フロンティア研究システムからの派遣なので、学会では「日本人」として登録されていました。実は、ちょうどこの頃に地質調査所海洋地質部に滞在されていたGlasby博士も日本から参加した為、「日本人」でした。“Yes, we are Japanese!”と二人で意気投合してたのがおかしかったです。こういう「日本人」が現れるのも、日本の

研究機関が外国人に門戸を開いてきた表れでしょう。

参加者の大部分は、開催地であるロシアの研究機関に所属する人でした。海外からの参加では中華人民共和国からの参加者がアメリカに次いで多く、会の性格から、お国の事情が反映した発表を聞きました。特に印象的だったのは、マングローブ林へのゴミの不法投棄でした。その被害をレポートするのかと思いきや、「マングローブは有機物の保持能力が高い。故にこのような投棄は効果的なゴミ処理と言える。」との結論で、それくらいの放置は許されるような規模なのか、そうでしないと市街地がゴミで埋まってしまうのかと、心配になりました。

このように包括的・現状報告的な会議はとすると玉石混交になりがちです。対策として主催者側から座長に、担当講演の採点を依頼していました。次回に発表応募があったときに、受理するかどうか

の参考にするそうです。

最後に余談になりますが、会場となったロシア科学アカデミー本部ビル(写真1)はガガーリン像が目印のガガーリン広場から歩いて10分くらいの所にあります。ひときわ目立つモダンな高層ビルなので、そこまでたどり着くのは容易でした。でも、中に入るのがまず大変。今でも科学技術には国家機密が多いのでしょうか、入り口に軍人風の制服を来た守衛が立っていて、身分証をチェックします。学会参加者はロシア語の身分証などありませんから、その度に学会担当者が手書きの証明書を書いてくれるのですが、その担当者が席を外していたら、戻るまで入ることができません。入ってからも、また大変。この建物は中心が完全な吹き抜けで、熱帯植物園のような広場になっています(写真2)。会場はその周りに配置されていたのですが、目印が無い為、いつまでも同じ所を周り続けたことが何度かありました。そういう不便さはありませんでしたが、テラスにはギリシャ神話を象ったと思われる彫像が並び、例えば日本の学術会議ビルを思い浮かべて、彼我においての、科学技術の国における位置づけの違いを感じました。



写真2
ロシア科学アカデミー本部ビル内部。

YAMAMURO Masumi (1999) : Report on international meeting "The Pacific Congress on Marine Science and Technology".

<受付：1999年10月1日>